

二人称代名詞の談話機能の地域間比較

関西大学大学院博士課程後期課程 山本空

1. はじめに

本発表では二人称代名詞がもつ談話機能を複数地域で比較し、その差異を分析する。発表者はこれまで方言談話にみられる対称詞について分析してきた。使用量については、愛知以西の西日本がより多く使用する傾向が見られ、その多くは文脈上必須でない、独立語的な二人称代名詞であった(山本(2016))。西日本では対称詞、特に二人称代名詞のフィラー化が進んでいると考えられる。山本(2018)では発話者の発話態度に着目し、ザトラウスキー(1991)を参考に談話を話段で区切り、聞き手を命令・叱責する「威圧」、聞き手に配慮する「遠慮」、聞き手に親しみを表す「親密」の3つに分類して分析した。すると、発話態度ごとに独立語的な対称詞の出方に差異が見られた。威圧・親密・遠慮の順で聞き手との距離を近くとっており、対称詞のフィラー化が進んでいるほど、どの話段でも省略可能な対称詞を用いることができる。それが地域差につながっていると考えられた。このように、対称詞の運用方法は地点ごとに異なり、談話機能も変化することがわかる。

本発表では特に、対称詞のターン交替に関わる談話機能について考察する。独立語的な二人称代名詞がターン交替に関わっている可能性があることは山本(2014)でも触れたが、二人称代名詞以外の要素に関してはあまり考察が及んでいなかった。そこで、発話の冒頭部にあらわれる要素を分析し、ターンの獲得方法に地域差があるかを探り、そこに二人称代名詞がどう位置するのかをみる。

2. 調査資料

調査資料は基盤研究A「日本語諸方言コーパスの構築とコーパスを使った方言研究の開拓」(研究代表者：木部暢子)において作成されたデータ(以下「日本語諸方言コーパス」)を用いる。このデータは国立国語研究所編『全国方言データベース 日本ふるさとことば集成』(以下『ことば集成』)の談話資料の音声データと文字資料を紐づけたものである。本発表ではここから秋田県湯沢市のデータと、兵庫県相生市、大分県大分郡狭間町(現大分県由布市)の談話データを用いる。話者情報は以下の通りである。

表1 分析資料の概要

地点	話者記号	性別	生年	収録日時	収録時間
秋田県湯沢市	A	男	1898年	1977年11月13日	22分04秒
秋田県湯沢市	B	女	1904年		
秋田県湯沢市	C	女	1909年		
兵庫県相生市	A	男	1911年	1985年8月28日	30分30秒
兵庫県相生市	B	女	1914年		
大分県大分郡狭間町	A	男	1906年	1978年10月24日、26日	20分58秒
大分県大分郡狭間町	B	女	1909年		
大分県大分郡狭間町	C	女	1899年		

3. 分析の枠組み

沖(2013)を参考にして、会話冒頭部における相手発話との関係づけの有無によって「とりこみ型」と「直截型」に分類する。「とりこみ型」とは「会話冒頭部に、相手発話との何らかの関係づけをあらわす語詞をとる」もので、「直截型」は「会話冒頭部に、相手発話との関係づけを示す語詞をとらず、ただちに実質的会話内容に入る」ものである。

(1) B: ホントニナーナンテ エッチモ ソー ユ ゴド ユーケア。(本当にねなどと いても そう いう こと [を] 言っていた。)

A: ニシノ ホーノ ヤマサ アガテ ミルド エジバ フィグエオダ。ココ°ア。(西のほうの山に上がってみると いちばん 低いものだ。ここは。)

(秋田県湯沢市・直截型)

(2) B: ソヤカ モー ソノ カイスイキ° ー ユー コトワ モー モットライデモ エーンヤ。ソヤカ ミナ パンツナリ ハイッター。(だから もう その 海水着[と]いうことは もう 持っていないでもいいんだ。だから みんな パンツのまま 入ったり。)

A: ソーヤナー。ムカシワ カイスイキ° ナンカ アレヘンモンナ。(そうだねえ。昔は 海水着なんか ないものね。)

(兵庫県相生市・とりこみ型)

また、とりこみ型の中には以下のような下位分類がある。

- ① あいづち型
- ② 繰り返し型
- ③ 指示詞型
- ④ 接続詞・副詞型
- ⑤ 共話型
- ⑥ 質問直截返答型

沖(2013)はこの分類方法で『ことば集成』の岩手県・東京都・奈良県のデータを分析し、東京都は直截型が6.0%で「常に相手を意識した会話である」のに対し、岩手県は直截型が25.8%で、「忖度せず、単刀直入に本題に入る率直な談話展開がみられる」として、会話冒頭部にみられる地域差を指摘した。奈良県は14.5%であった。さらに、この地域差から「相手への配慮のしかたが、方言によって異なっている」ことも指摘した。とりこみ型の下位分類は、岩手県・東京都・奈良県以外の地点では上記の種類以外の型が存在すると沖(2013)で述べられているが、発表者が分析する3地点のうち2地点に感動詞、フィラ

一が冒頭にあらわれた。これは上記の6つに当てはまらないため、「感動詞フィラー型¹⁾」として分類した。また、会話冒頭部の認定であるが、沖(2013)は『ことば集成』の文字化資料に従って発話冒頭部を認定している。『ことば集成』は発話や音声の重なりがあった場合に、主な話し手の発話の中に重なった発話を組み込んでいる。そのため単なる笑いやあいづちも重なっていなければ1つの発話となる。

(3)A: バーサン モラウ トキャ X1 サンガ ヨーイ オマーイ ドゲー スノカー
チューチ オコリヨッタ。 (C {笑}) {笑} ドゲー シュー タチ オラ オ
マエ、ヘイタイニ イカンナラン ナンノ ユーチナーエ、ワシャ ホゲンジョー
イーヨッタワ。{笑}(おばあさん[を] [嫁に] もらう 時は X1さんが「おい お
まえ どう するのか」と言って 怒っていた。(C {笑}) {笑} 「どんな
に しよう と言ったって 私は あなた、兵隊に 行かなければならない」など
と 言ってね、私は でたらめばかり 言っていたよ。 {笑})

C: ハーン。(ああ。)

A: ホゲカラ ホゲオ イーヨッタキ オコラルルバツカリ。(でたらめから でたらめ
を 言っていたから 怒られるばかり。)

(大分県大分郡挾間町・『ことば集成』における発話例)

一方発表者は「日本語諸方言コーパス」を分析資料としており、沖(2013)とは発話冒頭部の認定方法が異なる。発表者は実質的な発話者が交替したときにターンが交替したと認定する。あいづちなど、実質的ではない発話のみの場合はターンが交替したと認めない。

ところで、沖(2013)が分析した3地点は対称詞の使用が少ない地点であった。また、発表者は『ことば集成』のほかにも国立国語研究所共同研究プロジェクト「方言談話の地域差と世代差に関する研究」(プロジェクトリーダー:井上文子)および科研基盤C「方言ロールプレイ会話における談話展開の地域差に関する研究」(代表:井上文子)において収録された方言談話(以下「ロールプレイ会話」)も使用しているが、奈良県、岩手県は収録されていない。そこで、『ことば集成』において独立語的な対称詞を多用し、「ロールプレイ会話」にも収録されている兵庫県相生市と大分県大分郡挾間町²⁾、市町村は違うものの「ロールプレイ会話」に収録されており、比較ができる秋田県湯沢市を分析対象にした。この3地点の会話冒頭部にあらわれる要素を分析し、地域差をみる。

1 「アノ」や「マー」等、指示詞や副詞由来のフィラーはそれぞれ③指示詞型、④接続詞・副詞型に分類している。

2 「ロールプレイ会話」の話者はこの中の庄内町の出身であるが、大分県大分郡挾間町は現在湯布院町、庄内町と合併し由布市となっているため、同一の地点とみなした。

4. 各地点における会話冒頭部の状況

本節では各地点における会話冒頭部の状況について述べる。会話冒頭部に現れる要素を分類し、型ごとに総数と割合を示す。そこから地点ごとの特徴と、どのような地域差がみられるのかを分析する。

4.1 秋田県湯沢市

秋田県湯沢市(以下湯沢市)の談話を分析した結果、表2のようになった。直截型は29.1%と最も高い数値が出た。

(4)B: ホントニナーナンテ エッチモ ソー ユ ゴド ユーケア。(本当にねなどと いても そう いう こと [を] 言っていた。)

A: ニシノ ホーノ ヤマサ アガテ ミルド エジバ フィグエオダ。 ココ° ア。(西の ほうの 山に 上がって みると いちばん 低いものだ。 ここは。)

(秋田県湯沢市・直截型)(=(1))

おなじ東北地方である岩手県において直截型の値が高かったが、湯沢市も同様に「付度せず、単刀直入に本題に入る率直な談話展開」がみられた。次に数値が高かったのはあいづち型であった。

(5)A: オメアダ シラネア ゴドダノモ。(あなたたち [は] 知らない ことだけれども。)

B: ンダ ナンジシテ シラネアンダ。(そうだ どうしても 知らないのだ。)

(秋田県湯沢市・あいづち型)

表2 秋田県湯沢市の会話冒頭部

型		数	割合
とりこみ型	①あいづち	52	24.8%
	②繰り返し	9	4.3%
	③指示詞	36	17.1%
	④接続詞・副詞	28	13.3%
	⑤共話	4	1.9%
	⑥質問直截返答	23	11.0%
⑦直截型		58	27.6%
合計		210	100.0%

感動詞フィラー型は湯沢市においては出現しなかった。ただし、あいづち型、指示詞型、接続詞・副詞型において、実質的にはフィラーとして用いられている例が9例見られた。

(6)A: アノー チケオノデンバ フユ クナゲア。 マnダダナ。(あの 漬物という と 冬 [に] 食べますか。 まだだね。)
(秋田県湯沢市・フィラーとして用いられている指示詞型)

これらを「フィラーとして用いられているもの」として分類しなおすと表3のようになる。その値は4.3%と特別目立つものではなく、湯沢市ではフィラー的な要素でターンを獲得することはあまりないと思われる。

表3 秋田県湯沢市における会話冒頭部Ⅱ

型		数	割合
とりこみ型	①あいづち	51	24.3%
	②繰り返し	9	4.3%
	③指示詞	30	14.3%
	④接続詞・副詞	26	12.4%
	⑤共話	4	1.9%
	⑥質問直截返答	23	11.0%
	⑧' フィラーとして用いられているもの	9	4.3%
⑦直截型		58	27.6%
合計		210	100.0%

また、湯沢市において会話冒頭部に二人称代名詞が現れるのはまれで、現れても連体修飾をする例であった。また、一人称代名詞は会話冒頭部によく表れるのだが、そちらも連体修飾の例が多く、フィラーのように使用されているものは見られなかった。

(7)A: オメアエノ エマデア ミnジ ナチ シマタノモ アレア ドデコnデヨ。(あなたの家の 今では 道 [に] なって しまったが あれは 土手でね。)
(秋田県湯沢市・会話冒頭部に現れる二人称代名詞)

秋田を含む北部東北方言における談話展開の方法については久木田(2009)が「自由に主張しながらも、言い終われば相手の話を聞くという方法である」と述べている。自分の主張があるときは前置きなしに直接本題に入る形でターンを獲得し、相手発話との関係を示す

必要がそれほどないために直截型が多くなるのではないかと思われる。

4.2 兵庫県相生市

兵庫県相生市（以下相生市）の談話を分析した結果、表4のようになった。これを見ると、直截型は13.4%であり、奈良県の結果と近い数値が出ていることがわかる。

表4 兵庫県相生市の会話冒頭部

型		数	割合
とりこみ型	①あいづち	67	37.4%
	②繰り返し	11	6.1%
	③指示詞	16	8.9%
	④接続詞・副詞	35	19.6%
	⑤共話	4	2.2%
	⑥質問直截返答	13	7.3%
	⑧感動詞フィラー	9	5.0%
⑦直截型		24	13.4%
合計		179	100.0%

(8)A: アノー X1ハン ユー シトカ° アルワナー。(あの X1さん [と] という人がいるよねえ。)

B: ハー ハー ハ ハー。(はあ はあ は は はあ。)

A: X2ノ ムスコヤ。(X2の息子だ。)

B: ワタシ ドーキューセヤ。(私 [は] 同級生だ。) (兵庫県相生市・直截型)

最も多かったのはあいづち型である。相生市は発話の継続部においても話し手の発話にあいづちを多くさしはさんでおり、あいづちをうつことで話を聞いていると示すことを好むようである。

(9) B: ソヤカ モー ソノ カイスイキ° ー ユー コトワ モー モットライデモ エーンヤ。ソヤカ ミナ パンツナリ ハイッター。(だから もう その 海水着 [と] ということは もう 持っていないでもいいんだ。だから みんな パンツのまま 入ったり。)

A: ソーヤナー。ムカシワ カイスイキ° ナンカ アレヘンモンナ。(そうだねえ。昔は 海水着なんか ないものね。)

(兵庫県相生市・あいづち型)(=(2))

このあいづちを「ウン、ハー、ソー」などの非分析的あいづちと「ソーヤデ、ソーヤナー」等の分析的あいづちに分類³したところ、非分析的あいづちは52例、分析的あいづちが10例と、非分析的あいづちが圧倒的に多かった。これらは「アー アー アー」といったように連続して現れたり、「ン イヤ ソノ ナツモナ。」といったように直ちに否定が入ったりする例がみられ、聞き手の話をじっくりと聞いているというより自分の話をしたいがひとまずあいづちを打って機会を待っている場合もあるようである。

接続詞・副詞型も19.6%とあいづち型に次いで多かった。その内訳は接続詞が27例、副詞が8例であった。

(10)B: ソヤケ ソノ ダメオ ヒロテ ミンナ アンタ モッテ モーッテ ユカ° イテヤナー ホイデ ハリデ タベヨッタデショ。(だから その ダメを 拾って 皆 あなた それで あのー むしろ [を] 敷いて 門の外で それで 夏でも そういう。)
(兵庫県相生市・接続詞・副詞型)

また、感動詞フィラー型に着目すると5.0%であった。相生市は「イヤ」が冒頭部に出現することが複数回あり、9例中7例が「イヤ」であった。

(11)B: イヤ ウチラモ キータデ アズキアラエ ウン。(いや 私たちも 聞いたよ 「小豆洗い」 うん。)
(兵庫県相生市・感動詞フィラー型)

この中で、「アンタ」からはじまる発話が1例見られた。(8)がその例だが、発話冒頭にみられる「アンタ」は二人称代名詞としての機能は薄れており、フィラーとして用いられていると考えられる。

(12)B: アンタ コノ ガッコノ ハシノ シタニモ。(あなた この 学校の 橋の 下にも。)
A: アンナ コト イマカラ オモタラナ。(あんな こと [は] 今から 思ったらね。)
B: アズキアラエカ° オル ユータノニ。(「小豆洗い」が いる [と] 言ったのに。)
(兵庫県相生市・感動詞フィラー型)

(12)はそれぞれの発話が交錯しており、お互いがターンを獲得しようとしている場面である。このように発話者がターンを獲得したい場合にあらわれる要素としてフィラー化した二人称代名詞が存在する。相生市では会話冒頭部付近にフィラーとして用いられている二人称代名詞が現れることがあり、発話者がターン獲得をする際、その補助的な役割を担っているのではないだろうか。

³ 沖(2013)

(13)A：ヤデ イマミタイニ アンター モー デンドーソーチノ ナンヤー カンヤー
ユタテヤナー ソヤナ モン アラヘンカラナー アソビドーグヤ。(だから 今みたい
に あなた もう 電動装置の 何だ かんた [と] 言ってもだねえ そんな もの
ないからねえ 遊び道具<だ=だなんて>。)

(兵庫県相生市・フィラーとして用いられている二人称代名詞)

これらに加えて、湯沢市と同様にあいづち型や指示詞型、接続詞・副詞型の中にはフィ
ラーとして用いられているものも存在する。

(14)A：アノ フルサトノオモイデバナシ。(あの ふるさとの思い出話。)

B：フン フン フン フン。(ふん ふん ふん ふん。)

(兵庫県相生市・フィラーとして用いられている指示詞型)

これらを「フィラーとして用いられているもの」として分類すると表 5 のようになる。
感動詞フィラー型とフィラーとして用いられているものを合わせると 10.6%となり、湯沢
市と比べると大きな割合を占めていることがわかる。

表 5 兵庫県相生市の会話冒頭部Ⅱ

型		数	割合
とりこみ型	①あいづち	62	34.6%
	②繰り返し	11	6.1%
	③指示詞	14	7.8%
	④接続詞・副詞	32	17.9%
	⑤共話	4	2.2%
	⑥質問直截返答	13	7.3%
	⑧感動詞フィラー	9	5.0%
	⑧'フィラーとして用 いられているもの	10	5.6%
⑦直截型		24	13.4%
合計		179	100.0%

4.3 大分県大分郡狭間町（現大分県由布市）

大分県大分郡狭間町（以下狭間町）の談話を分析した結果、表 6 のようになった。直截
型は 19.9%と、湯沢市と相生市の中間であった。

表6 大分県大分郡狭間町の会話冒頭部

	型	数	割合
とりこみ型	①あいづち	28	19.9%
	②繰り返し	15	10.6%
	③指示詞	13	9.2%
	④接続詞・副詞	29	20.6%
	⑤共話	6	4.3%
	⑥質問直截返答	20	14.2%
	⑧感動詞フィラー	2	1.4%
	⑦直截型	28	19.9%
	合計	141	100.0%

(15)B: モー アレジャー アレカラ ゴジューネンニ ナルンジャキーナー。 ユータモンノ ヤッパー。(もう あれだ あれから 五十年に なるのだからね。 そういうものの やっぱり。)

C: ソーナー。(そうね。)

A: コトシヤ オバン ドーデン オレ キンコンシキラシーワ。(今年は おばさん どうやら 私 金婚式らしいよ。)

(大分県大分郡狭間町・直截型)

とりこみ型の中では接続詞・副詞型が 20.6%と最も高く、なかでも「モー」が 29 例中 12 例と最も多かった。しかし、その中の半数に当たる 6 例はフィラーとして用いられているものであった。

(16)A: オトロシイ イネトリガ ハヨ ナッタ モンジャ モー。(おそろしく 稲刈りが早く なった ものだ もう。)

C: モー アータ ナカン X3 サントコワ キョー コメスリジャ。(もう あなた 中の X3 さんのところは 今日 米すりだ。)

(大分県大分郡狭間町・接続詞・副詞型)

(17)C: モー アンタガ カズガ スクナイキナーエ。(もう あなたは <数=子どもの数>が 少ないからね。)

(大分県大分郡狭間町・フィラーとして用いられている接続詞・副詞型)

このような用例を「フィラーとして用いられているもの」として分類すると表 7 のようになる。感動詞フィラー型と「フィラーとして用いられているもの」を合わせると 9.2%となる。

表7 大分県大分郡狭間町の会話冒頭部Ⅱ

型		数	割合
とりこみ型	①あいづち	25	17.7%
	②繰り返し	15	10.6%
	③指示詞	13	9.2%
	④接続詞・副詞	21	14.9%
	⑤共話	6	4.3%
	⑥質問直截返答	20	14.2%
	⑧感動詞フィラー	2	1.4%
	⑧'フィラーとして用いられているもの	11	7.8%
⑦直截型		28	19.9%
合計		141	100.0%

(16)にもみられるが、狭間町では会話冒頭部の次の要素としてフィラー化した二人称代名詞が多く出てくる。さらに、二人称代名詞だけでなく、(15)のように親族名称でも現れうる。

また、共話型の値にも注目したい。湯沢市、相生市は2%前後の数値であったが、狭間町は4.3%と比較的高い数値を示している。狭間町の話者は聞き手と協力して会話を作り上げていくという意識が強いと考えられる。その聞き手意識の強さが対称詞の使用量、フィラー化に影響しているのではないだろうか。

5. おわりに

本発表では秋田県湯沢市と兵庫県相生市、大分県大分郡狭間町の談話データを用いて、発話の冒頭部にあらわれる要素を分析した。秋田県湯沢市は直截型が最も多く、続いてとりこみ型の中のあいづち型が多いという結果であった。一方で兵庫県相生市は、直截型はそれほど高くはなく、あいづち型は3地点で最も高い数値が出た。また感動詞、フィラーとして用いられるものの値が高かった。大分県大分郡狭間町は感動詞、フィラーとして用いられるもののほかに、共話型の値が高いことが特徴的であった。このように今回分析した3地点でも沖(2013)の指摘する会話冒頭部の地域差、相手への配慮のしかたの地域差がみられた。その中で、対称詞のフィラー化が進んでいる地域は会話冒頭部に感動詞フィラー型、もしくはフィラーとして用いられているものの出現が多いことから、会話冒頭部に感動詞、フィラーを多く用いる地点は対称詞のフィラー化が進みやすいと考えられた。

参考文献

- 沖裕子(2013)「大規模方言談話資料にみる受話法の地域差」熊谷康雄編『大規模方言データの多角的分析 成果報告書—言語地図と方言談話資料—』国立国語研究所
- 久木田恵 (2009)「方言談話における会話方法の地域差-談話展開方法の分析」『言語』38(4)
- 国立国語研究所編(2001~2008)『全国方言データベース 日本ふるさとことば集成』国書刊行会

ポリー・ザトラウスキー(1991)「会話分析における「単位」について—話段の提案」『日本語学』10—10 明治書院

山本空(2014)「方言談話における二人称代名詞の談話機能」『日本方言研究会 第99回研究発表会発表原稿集』日本方言研究会

山本空(2016)「方言談話における対称詞の使用量の地域差」『国文学』100 関西大学国文学会

山本空(2018)「ロールプレイ会話における省略可能な対称詞の使用と対人距離の地域差」『日本方言研究会 第106回研究発表会発表原稿集』